

アレクサンドル・ファルギエール作《聖ヴァンサン・ド・ポール像》(1879)をめぐって —第三共和政期の政治と宗教のはざまで—

請田 義人 (倉敷芸術科学大学)

本発表は第三共和制期に主に活躍した彫刻家アレクサンドル・ファルギエール(1831-1900)の《聖ヴァンサン・ド・ポール像》について論じるものである。この作品は1879年のサロンに出品されたのち、1944年までパンテオンに納められたものであり、現在はパリ北西の郊外、クリシーにあるサン・ヴァンサン・ド・ポール＝サン・メダール教会に安置されている。ファルギエールの作歴の中期から後期をつなぐ時期に位置づけられるこの作品について、これまでまとまった研究は存在しない。本発表ではこの作品の図像や主題、同時代の言説および展示されていた空間について分析しながら、宗教性と政治性のはざまにあって機能していたこの作品の性格を明らかにしていく。

本作は17世紀フランスの聖人、ヴァンサン・ド・ポールを等身大以上のスケールで表したものである。パンテオンに納められるという一種のモニュメンタルな性格も有しているという点で、その後のこの彫刻家の大規模なモニュメント制作へとつながる過渡期的な作品といえる。本発表ではまず作品の主題と図像の分析を行う。この聖人の伝記等を分析することによって、この幼児たちを抱える主題の源泉を探る。また過去や同時代の図像上の類例と比較したうえで、同時代批評の分析を通して、二人の幼児を抱き上げる聖人の図像が、フランス彫刻の伝統のなかに位置づけられながらファルギエールの自然主義的な個性も表しているという、この彫刻家に特徴的な批評的傾向のなかで捉えられていたことを明らかにする。そのうえで、多様な主題によって表されてきたこの聖人に、なぜ本図像が選択されたのか考察する。パンテオン(当時はサント・ジュヌヴィエーヴ大聖堂)を飾る作品としてこの図像が採用された背景には、当然、フランスを代表する聖人という「父」性的性格がこの人物に求められたのであり、キリスト教のもとに同時代の人々をつなぐ意味合いが込められていた。

次に、この作品の収蔵された場所と像主の問題を総合して検討していく。本作はパンテオン(サント・ジュヌヴィエーヴ大聖堂)のためにファルギエールに注文された作品である。そのほかの数多くの作品とともに、聖堂を飾るものとして、美術長官シュヌヴィエールらの構想のなかで作品の依頼がなされた。19世紀に入って、聖ヴァンサン・ド・ポールはフランスという国家を代表する聖人として改めて崇敬され直していくが、その過程でパンテオンという空間においてもまた、この聖人を表す像が求められたのである。同時代の資料を分析しながら、パンテオンという場において宗教性と政治性が絡み合いながら美術に求められていた機能を、この聖ヴァンサン・ド・ポール像を例に明らかにしていく。